つれづれなるままに　第17号

令和２年１月７日（火）発行

校長　深谷　浩一

ボランティアって何だろう！(3)

～「生徒をもっと大人扱いするべきだ！」～

前号までに，20年以上前，アメリカコロラド州出身のトッド・フラリー先生が本校で外国語指導助手（ALT）として勤務していたこと，彼は大洗の海岸を訪れ，その汚さに驚き「大洗海岸クリーンアップ作戦」を企画したこと，その企画には，県内で勤務するALTや生徒など400人以上が参加したことなどについて，お話ししました。その後，トッド先生はその時の経緯を「地球の日―大洗にて」で報告し，さらに，インタビューの中でボランティア活動についての考え方を示しました。その中では，「日本の高校生は幼稚だ」「日本人は高校生だけでなく，大人も幼稚だ。」などと挑発的な表現が使われていましたが，発言の趣旨は「日本の高校では，生徒をもっと大人扱いするべきだ。」ということであり，多くの生徒たちの共感を得ることができました。

とはいえ，生徒の中にはトッド先生の意見に対して露骨に反感を示すものもいたようです。今回は，そうした少数派の意見も含めて「当時の生徒達が感じたこと」を，当時私が担任したクラスで刊行した冊子（『翼の軌跡』（平成９年度中央高等学校第３学年６組発行））から拾ってみたいと思います。

「ボランティアについての事は少しずつだけど，その波紋はやがて大きな波になると思う。（S.I）」

「授業でない授業という感じで，興味深かった。例えば，アジアの苦しんでいる人たちに何か送りたいと思っても私たちは一体どうしていいのかわからない。学校でも詳しく知っている人はたぶんいると思う。そういうことを紹介してもいいと思う。(N.K)」

「深谷先生やトッド先生のような先生がもっとふえてほしい。いい事教えてくれる先生がいて本当によかった。感謝しています。(H.I)」

これらは，多くの生徒たちが抱いた，授業に対する率直な意見だろうと思われます。生徒たちはトッド先生の指摘を肯定的に捉え，「自分にできることはないか」と批判に対して前向きに受け止めようとしていたのではないかと思われます。ボランティア活動に対しても前向きで，「人のために自分にできることをしたい」と願う生徒たちがたくさんいたからなのではないかと思われます。

そうした生徒たちに対して学校ができることは，もっとボランティア活動に係る情報を生徒たちに提供し，生徒たちがより社会性を身につけるためのお手伝いをすることだと思われます。

挑発的なトッド先生に対しては，逆に，反発を覚え批判的な意見を述べた生徒もいました。もう少し生徒たちの声に耳を傾けてみます。

私を変えたボランティア活動

M. K.

私は将来福祉関係の仕事をしたいと思っています。そのきっかけとなったのが、ボランティアでした。もしそれがなかったら、今夢もなくつまらない毎日を送っていたかもしれません。でも私はまだ人間的にできていないと思うので、大学に入学して自分を成長させ、人間的に大きくなりたいと思っています。そんな私もみんなにもっとボランティア活動に参加してほしいと思っています・・・が大学に入学するのに、就職するのに有利だからという理由だけでボランティア活動に参加してほしくありません。でももしきっかけがそうであっても、何度かやっているうちにその気持ちは変わってくると思うのです。私はそんなにたくさんボランティア活動をやってきたわけではありませんが、活動をするたびに多くのことを学んできました。それでもやっぱり、まだまだ学ぶべき事はあると思うのです。そのために私は大学生になりたいと思っています。今の私のまま社会に出て働くというのはまだ無理だと思うからです。それはトッド先生のいう成熟さや社会的な責任がないということかもしれません。

私は高校生という時期は人間としての土台を作っている最中であると考えています。学校嫌いの私であるけれど、ちゃんと学校に通っているのは、そういう考えが自分の中にあるからです。そんな私はたまにムカつくことはあっても、嫌いな人は誰一人としていません。なぜなら、人は良い所も悪い所もあることを知っているからです。私は今回のトッド先生の意見は日本の悪い所しか語っていないように思うのです。次回もしこういう機会がありましたら、是非日本の良い所も見つけて語って下さい。日本だって良い所があります。そして今以上にもっと日本を好きになってください。

ではこれからもお仕事がんばってください。また会う日まで・・・。

ボランティア活動をきっかけとして，将来福祉関係の仕事をしたいと思うようになったというＭ．Ｋさん。自分を成長させてくれたボランティア活動を人に勧めるのは，それは大学に入るためとか，就職に有利だからという理由ではなく，トッド先生の言う「成熟さ」や「社会的責任」を身に付けるためだと理解しているようです。とすれば，もうすでに十分「成熟した」大人としての考え方が身に付いていると言えるのではないでしょうか。

さらに，トッド先生の意見が「日本の悪い所しか語っていない」ので，日本の良い所も見つけて，「今以上に日本を好きになってください。」などと日本に対する理解を促しているところは，実に成熟した大人としての対応です。今の言葉で言えば，「神対応」と言ってもいいかも知れません。

続いて，もうひとつ，トッド先生に対して批判的な意見を紹介します。

日本の文化を知って！

S. K.

私は「ボランティア・サークル」と呼ばれている団体に所属していますが、日本のボランティアについて言うと、はっきり言ってバカみたいです。高校生で集まるというとふざけた団体になりそうですが、その逆で県や市からの決め事が厳しかったこともあって「ボランティアをするまじめでしっかりした子（高校生）の集まり」っていう自意識ばかり強くて、本来の活動そっちのけで会員の服装だとか言葉遣いばかり気にしている団体でした。そんなんだから、ボランティア活動となると、「あの人はよくできる」とか「あの人はだめ」とか評価する人が出てくる始末。ボランティア、ボランティア言ってて結局自分達自

身ボランティアってどんなものかわかっていないんです。

私は3年間やってて自分なりのボランティア持っています。私のボランティアは、例えば自分の側を通りかかった人が荷物を落とした時に拾ってあげることです。そんなとても簡単で、誰にでもできることでいいんです。それをボランティアって呼ぶべきなんだと思います。

それを考えて言わせてもらえば、日本人にはしっかりとボランティアの精神があります。少なくともまったく持ってないわけではないんです。先生の国ではどうかなんて知りません、行ったことないし。先生の目から見て日本人がどんなに腐っているように見えようとも、ここは先生の生まれ育った国とまったく違う歴史をたどってきた、まったく別の一つの国なんです。

他人の欠点を見つけることって、良い点を見つけることより簡単なんだって知ってましたか。先生の言っていることは、確かだろうと、そうでなかろうと「言ってはいけないこと」です。（この際断言させていただきます。）国際化って言いますよね。その社会で一番大切になってくるのは、「お互いの文化を認め合う」ってことなんです。私のいとこはタイ人で、今日本の高校に通うために私たちと同居していますが、私ははじめその生活の違いに驚きました。暇があるとテレビを観て、ゲームをして、日曜日ともなると1日中でもテレビの前にいます。彼の国ではそれでよかったんです。しばらく私は彼の生活を見るのがイライラしていやで、いつも怒っていました。だけどそれが文化の違いだとその時理解したんです。だから先生の気持ちが判らなくもないんですが。

国を出て日本に来ている以上は日本の文化をよく知らなくてはと思います。受験についても、今の流行についてもそうです。日本がどんな歴史を持っていて、日本人はどんな考えを持っていて今の文化になっているかをどうしても理解に苦しむのなら、とっとと自分の国に帰ってもう二度と外国へなんか行かなければいいと思います。

受験について言わせてもらえば、私もいろいろ不満はあるが、この国では大学出なくてはろくな仕事もないし、仕事がないってことはどこぞの橋の下に段ボールのお家を作るということで、しかもその苦しみはちょっと血のつながった親戚にまで影響する。あの人の親戚に「るんぺん」がいるって風に。日本は狭いのでそういう噂は大問題なんです。私にしてみれば、大学は別に仕事のためだけって訳ではないんですけど、とにかく行って学びたいことがたくさんあって、でも大学受験にはまったく意味がないように思われる勉強まで必要で、「○○大学に受かるためだけの勉強」なんて自分でやってても無駄だなあと思いながらも、自分にはこの受験制度をどうすることもできっこないし、どうしても大学には入りたいから、大学合格した後の自分のために今必死でやってるんです。

私は他の人が受かろうと落ちようと知りません。自己中心的と言われようと何と言われようとかまわないけど、他人にバカにされるような生き方だけはしていません。

「ボランティアって何だろう？」と，ボランティア活動の本質を問うような意見です。これを書いたＳ．Ｋさんは，「自分にはこの受験制度をどうすることもできっこない」と言っていますが，20年前私は，Ｓ．Ｋさんには，大学に進学して「受験制度に物言える」ような人になってもらいたいと，『翼の軌跡』の中でコメントしました。トッド先生に対して，失礼な表現も見られますが，いずれ成熟した「大人」になれば，それも改まることでしょう。

さて，最後にもうひとりだけ紹介します。

「Todd先生の授業も深谷先生の授業も大好きでした。本当に大切なことを教えてもらったような気がします。Todd先生のプリント読んで，うちの親，一度は『うん，そうだね』って言ってました。でもその後で『でもあんたはそれよりも勉強しなくちゃいけない』って言われました。このままじゃ何も変わらないようで，すごく怖いです。どうすれば変えていくことができるんでしょうか。何かを変えようとするのってすごく難しいですね。(Y.O)」

この生徒は，当時私が気にかけていた「生徒たちは，学校で学んだことを次の世代にどう伝えていくのだろうか。」という問いには，多少悲観的に，社会の理解が得られていないことを嘆いています。

あれから22年。今の生徒の皆さんは一体どう考えるでしょうか。（つづく）